

NICU実習の学生の対児感情におけるカンファレンス導入の効果

著者	大久保 明子, 和田 佳子, 秋山 啓子
雑誌名	新潟県立看護短期大学紀要
巻	7
ページ	3-8
発行年	2001-12
その他のタイトル	A Study of the Effect of Post-Conference on students' Maternal Affect Toward Babies While Engaged in a Clinical Rotation in the Neonatal Intensive Care Unit(NICU)
URL	http://hdl.handle.net/10631/557

NICU 実習の学生の対児感情におけるカンファレンス導入の効果

大久保明子, 和田 佳子, 秋山 啓子

新潟県立看護短期大学

A Study of the Effect of Post-Conference on students' Maternal Affect Toward Babies While Engaged in a Clinical Rotation in the Neonatal Intensive Care Unit (NICU)

Akiko OHKUBO, Keiko WADA, Keiko AKIYAMA

Niigata College of Nursing

Summary The purpose of this study was to examine the effect of post-conference on nursing students' maternal affect toward babies while engaged in a clinical rotation in the NICU. This study examined the maternal affect of third year nursing students toward babies both before and after they engaged in the use of post-conference as a teaching/learning method.

Prior to the introduction of the post-conference, the research findings suggested that nursing students' maternal affect toward babies were one of decreased approach feeling score and increased conflict index. Following the use of the post-conference, students' were again assessed and found to manifest decreased avoidance feeling score, approach feeling score, and conflict index toward the babies in the NICU.

These findings suggest that the post-conference during the clinical rotation in the NICU might influence the nursing students' negative feelings toward babies.

要約 本研究の目的は、NICU 実習において、学生の対児感情の視点から、カンファレンスを導入した効果を検討することである。看護学生3年次のNICU 実習前後に、対児感情の変化を調査した。

カンファレンスをしなかった学生の対児感情は、接近得点が有意に低下し、拮抗指数が有意に高くなった。また、カンファレンスを行った学生の対児感情は、接近得点・回避得点・拮抗指数がともに有意な低下があった。

NICU 実習後のカンファレンスは、学生の児をネガティブにとらえる感情に影響があったと推察できる。

Key words 新生児集中治療室 (Neonatal intensive care unit)

対児感情 (Maternal affect toward babies)

カンファレンス (Conference)

小児看護 (Pediatric nursing)

看護学生 (Nursing student)

I. はじめに

本学の小児看護学実習では、「Neonatal intensive care unit (以下 NICU とする) における看護の実際を学ぶ」ことを目標に NICU 見学実習を行っている。学生の NICU 実習記録をみると、「かわいそう」「小さくてショックだった」「弱々しい」などの記載がみられた。NICU 実習は、特殊な環境下での治療を要する乳児が対象であるため、上記のような感想を持つことは容易に理解できる。NICU 看護の対象は児とその両親であり、学生のこのような感情は未熟児を生んだ両親の気持ちを理解する上で大切である。また、大津¹⁾は「人は自分自身の認知する枠組みに沿って対応し行動するため、学生が未熟児に対してネガティブイメージを持っていれば、その学生が実施する看護は消極的になると考えられる。」と述べているように、NICU の児の看護を行う場合には、児に対する感情が基盤となると考える。看護はその対象に関心を向け、思いやる気持ちが大切である。特に NICU の児は自ら話すことができず、児の反応やサインが見えにくいいため、看護者には児を慈しみ、近づこうとする気持ちを持つことが必要となる。このような考え方から学生の児に対する感情を花沢²⁾の「対児感情評定尺度」を用いて測定することにした。

「対児感情評定尺度」を用いた NICU 看護に関する研究では、岩戸ら³⁾の低出生体重児のコット移床による両親の対児感情の変化や、関森ら⁴⁾の低出生体重児の経口哺乳が母親の対児感情に及ぼす影響、中島⁵⁾のカンガルーケアと抱っこケアを実施した早期産の母親の対児感情について比較した報告がある。看護学生を対象とした研究では、母性看護学での正常新生児の看護を経験することにより、学生の児に対する接近感情が上昇し、回避感情が低下するという報告^{6) 7) 8)}がある。また、Growing Care Unit 実習での低出生体重児との接触体験により接近感情は高まり、回避感情が低下したという嶋松⁹⁾の報告がある。対児感情は、乳児との接触体験が多いと接近感情が高くなり、回避感情が低下する傾向があるといわれている²⁾が、直接的ケアを実施しない NICU の見学実習での学生の対児感情を明らかにした報告はない。

小児看護学の限られた実習時間の中で NICU 看護を効果的に指導するための基礎的データとして、NICU 看護の実践に影響すると考える学生の対児感情の変化について調査をした¹⁰⁾。その結果、NICU

見学実習後の学生は、児に対する接近感情が低下することが明らかになった。このことから、学生が児をネガティブにとらえるだけでなく、その感情を NICU 看護の必要性に結びつけて考えられるような実習方法の検討が必要であると考えた。そのためには、救命処置や看護ケアの高度な技術場面の見学に加えて、退院後の母親の喜ぶ姿や生き生きと看護する看護者の姿を理解できるような配慮や、NICU の児やその看護について看護者と直接ディスカッションする機会を作り、理解を深めることが必要ではないかと考えた。また岡田¹¹⁾は、実習において否定的に認識される葛藤体験を自己の成長にとって意味あるものとして肯定的に受け止めるために、葛藤体験を語るカンファレンスの実施をしているという報告からも、学生間のカンファレンスが児に対するネガティブな感情に影響を与えるのではないかと考え、カンファレンスを導入した。

そこで本研究は、NICU 見学実習後にカンファレンスを導入した実習方法について、学生の対児感情の視点から検討することを目的とする。

II. 研究方法

1. 調査対象

調査に同意を得た N 看護短大 20 代の女子学生。1999 年 96 名と 2000 年 96 名である (回収率 100%)。カンファレンス導入前の 1999 年の学生を A 群、導入後の 2000 年の学生を B 群とした。

2. 調査期間

1999 年 4 月～9 月および 2000 年 4 月～9 月。

3. 調査方法

NICU 実習前後に「対児感情評定尺度 (1996 年版)」による質問紙調査を行った。実習前の調査は、3 年次の臨床実習開始前に、学内の教室で行い、実習後については NICU 実習終了直後に調査用紙を配布し、回収した。学生には、研究の目的、趣旨及び実習評価に無関係であることを説明して調査への参加を依頼した。

4. 調査用紙

花沢²⁾の「対児感情評定尺度」は、接近感情と回避感情の 2 方向から構成された質問紙である。接近感情は「あかるい」「いじらしい」などの肯定的な 14 項目からなり、回避感情は「めんどうくさい」「いらだたしい」などの否定的な 14 項目で構成されている。また、「非常にそのとおり」「そのとおり」「少しその

とおり]「そんなことはない」の4段階で評定する。

5. 分析方法

対児感情評定尺度の採点法は、接近感情 14 項目の得点を合計した「接近得点」、回避感情 14 項目の得点を合計した「回避得点」、個人の接近得点と回避得点の拮抗を示す指標の「拮抗指数〔拮抗指数=(回避得点/接近得点)×100〕」を算出した。

有効回答は、対児感情の接近・回避得点については実習前後 2 回の調査で回答に記入もれないものとした。また、拮抗指数については接近得点が回避得点より上回る場合は、対児感情評定尺度の採点法としての標準的算出方法が適応できないため分析対象から除外した。これにより、A群の接近・回避得点 83 名、拮抗指数 79 名、B群の接近・回避得点 94 名、拮抗指数 89 名を分析対象とした。

分析の内容は、1) 各群の接近得点・回避得点・拮抗指数について実習前後で t 検定を行った。2) 各群の対児感情評定尺度の各項目について実習前後で t 検定を行った。分析には、統計ソフト STATISTICA '99Edicion を使用し、有意水準は、5% 及び 1% とした。

6. 小児看護学の実習体制

本校の小児看護学実習は 2 年次後期に保育園実習を行い、3 年次前期に小児病棟・NICU・重症心身障害児(者)病棟の実習を行っている。1997 年 4 月、実習病院が移転新築に伴い、NICU が開設されたことにより NICU 実習を組み入れた。NICU 実習の実習目標は「NICU 看護の実際を学ぶ」であり、目標の展開として「NICU の概要を理解する」「ハイリスク児の看護の実際を理解する」「家族への援助について学ぶ」の 3 点を挙げている。NICU 実習の方法は、学生 2～3 人が半日入室して見学実習を行う。学生

の指導は専任の臨床指導者が担当する。2000 年度の実習では実習終了時に臨床指導者・教員・学生参加による 30 分程度のカンファレンスを取り入れた。

III. 結果

1. 実習前後の対児感情の変化(表 1)

A群の NICU 実習前の接近得点の平均値は、26.12 (SD=6.17, N=83)、回避得点の平均値は、9.43 (SD=5.50, N=83)、拮抗指数の平均値は、34.82 (SD=18.92, N=79) であった。A群の NICU 実習後の接近得点の平均値は、23.37 (SD=8.30, N=83)、回避得点の平均値は、9.25 (SD=5.12, N=83)、拮抗指数の平均値は、40.57 (SD=22.85, N=79) であった。

B群の NICU 実習前の接近得点の平均値は、24.59 (SD=7.56, N=94)、回避得点の平均値は、10.0 (SD=6.12, N=94)、拮抗指数の平均値は、39.25 (SD=22.8, N=89) であった。B群の NICU 実習後の接近得点の平均値は、22.24 (SD=8.27, N=94)、回避得点の平均値は、6.93 (SD=4.65, N=94)、拮抗指数の平均値は、31.33 (SD=19.76, N=89) であった。

各群の接近得点・回避得点・拮抗指数の 3 変数について実習前後で t 検定を行った結果、A群の接近得点は実習後に有意な低下があった ($t(82)=3.933$ $p<.01$)。また、拮抗指数は、実習後に有意に高くなっていった ($t(78)=2.704$ $p<.01$)。回避得点は有意な差がなかった。B群の接近得点・回避得点・拮抗指数はともに有意な低下があった(接近得点: $t(93)=3.227$ $p<.01$, 回避得点: $t(93)=6.222$ $p<.01$, 拮抗指数: $t(88)=3.344$ $p<.01$)。

2. 対児感情評定尺度各項目の変化(表 2)

対児感情尺度の 28 項目それぞれについて実習前後で t 検定を行った。

表 1 NICU 実習前後の対児感情の変化

	A群					B群				
	n	実習前		実習後		n	実習前		実習後	
		平均	標準偏差	平均	標準偏差		平均	標準偏差	平均	標準偏差
接近得点	83	26.12	6.17	23.37	8.30	94	24.59	7.56	22.24	8.27
回避得点	83	9.43	5.50	9.25	5.12	94	10.00	6.12	6.93	4.65
拮抗指数	79	34.82	18.92	40.57	22.85	89	39.25	22.80	31.33	19.76

** : $p<.01$

表2 対児感情項目の実習前後の t 検定結果

	感情項目	A群			B群		
		前	後	t 値	前	後	t 値
接近項目	あかるい	1.98	1.71	3.16 **	1.93	1.55	3.82 **
	おもしろい	1.96	1.65	3.42 **	1.74	1.37	3.29 **
	いじらしい	1.35	1.30	0.56 n. s.	1.29	1.27	0.21 n. s.
	たのしい	2.18	1.83	3.29 **	2.19	1.61	6.13 **
	いとおいしい	2.47	2.45	0.31 n. s.	2.41	2.43	0.29 n. s.
	まるい	1.93	1.36	4.85 **	1.96	1.10	8.04 **
	うつくしい	1.24	1.40	2.06 n. s.	1.12	1.34	2.27 *
	あまい	1.65	1.25	3.48 **	1.51	1.31	2.09 *
	ういういしい	2.40	2.08	3.53 **	2.07	2.03	0.40 n. s.
	しろい	0.82	0.68	1.49 n. s.	1.13	0.77	3.23 **
	すばらしい	1.97	2.14	1.97 n. s.	1.85	2.24	4.12 **
	やさしい	1.46	1.49	0.27 n. s.	1.29	1.57	3.24 **
	みずみずしい	2.22	1.83	3.80 **	2.01	1.51	4.33 **
	うれしい	2.31	2.07	2.83 **	1.97	2.05	0.80 n. s.
	回避項目	よわよわしい	1.68	2.22	4.27 **	1.41	1.84
めんどくさい		0.78	0.75	0.39 n. s.	0.90	0.41	5.95 **
いらだたしい		0.28	0.26	0.36 n. s.	0.46	0.11	5.97 **
やかましい		1.12	0.53	6.83 **	1.28	0.42	9.95 **
わずらわしい		0.38	0.35	0.37 n. s.	0.49	0.17	4.13 **
あつかましい		0.16	0.20	0.75 n. s.	0.23	0.07	3.75 **
うっとおしい		0.33	0.18	2.38 n. s.	0.39	0.10	4.38 **
くさい		0.52	0.30	3.03 **	0.46	0.19	3.79 **
こわい		0.65	1.03	3.87 **	0.51	0.83	3.24 **
うるさい		0.95	0.56	4.45 **	1.18	0.39	8.82 **
じれったい		0.59	0.57	0.30 n. s.	0.59	0.50	1.01 n. s.
きたない		0.18	0.17	0.22 n. s.	0.29	0.12	3.36 **
にくらしい		0.11	0.10	0.28 n. s.	0.16	0.08	1.69 n. s.
むずかしい		1.70	2.02	3.19 **	3.67	3.73	0.57 n. s.

** p < . 01

* p < . 05

n. s. p > . 10

A群の接近項目の「あかるい」「おもしろい」「たのしい」「まるい」「あまい」「ういういしい」「みずみずしい」「うれしい」の8項目の得点が1%水準で有意に低下していた。回避項目の「よわよわしい」「こわい」「むずかしい」の3項目の得点が1%水準で有意に上昇し、「やかましい」「くさい」「うるさい」の3項目の得点は1%水準で有意に低下していた。

B群の接近項目の「あかるい」「おもしろい」「たのしい」「まるい」「しろい」「みずみずしい」の6項目の得点は1%水準で有意に低下し、「あまい」は5%水準で有意に低下した。また、「すばらしい」「やさしい」の2項目の得点は1%水準で上昇し、「うつくしい」は5%水準で有意に上昇した。

回避項目の「めんどくさい」「いらだたしい」「やかましい」「わずらわしい」「あつかましい」「うっとおしい」「くさい」「うるさい」「きたない」の9項目の得点は1%水準で有意に低下した。また、「よわよわしい」「こわい」の2項目の得点は1%水準で有意

に上昇した。

IV. 考察

カンファレンス導入前後の対児感情の変化についてみると、カンファレンスをしなかったA群のNICU実習後の対児感情は、実習前に比べて接近得点が低下し拮抗指数が高くなっている。これは、児に対する肯定的・受容的感情が低下し、児を肯定的感情と否定的感情との葛藤が大きくなっていることを示す。一方、カンファレンスを導入したB群のNICU実習後の対児感情は、接近得点・回避得点・拮抗指数の3変数全てが低下した。これは、児に対する肯定的・受容的感情が低下すると同時に、否定的・拒否的感情も低下し、さらに児に対する肯定的感情と否定的感情との葛藤が小さくなったことを示す。学生の対児感情に及ぼす母性看護学実習の影響として、和田⁸⁾は、母性看護学実習を経験した学生の接近得点は上昇して回避得点が低下し、対児感情が肯定し受容す

る方向に変化すると述べているが、NICU 実習では、カンファレンスの有無にかかわらず A・B 両群ともに実習後の接近得点が低下した。対児感情は乳児との接触体験が多いと接近感情が高くなり、回避感情が低下する傾向があるといわれる²⁾。このことから考えると、NICU 実習が直接ケアを体験しない見学という実習方法を取っていることが対児感情に影響しているのではないかと考えられる。しかし A 群と比べて、B 群の実習後の回避得点と拮抗指数が有意に低下したことは、カンファレンス導入による実習方法が、学生の対児感情に何らかの影響を及ぼしたと考える。

対児感情の各項目の得点の変化をみると、A・B 両群とも実習後に「まるい」「みずみずしい」「くさい」「うるさい」が低下し、「よわよわしい」「こわい」が上昇している。これらの結果は、NICU に入院している児の「保育器に収容されている」「皮下脂肪が少ない」「呼吸器を装着している」などの特徴を学生は的確にとらえていると思われる。

また、カンファレンスを行った B 群では「すばらしい」「やさしい」「うつくしい」の 3 項目の得点が有意に高くなり、「めんどくさい」「いらだたしい」「わずらわしい」「あつかましい」「うっとうしい」「きたない」の 6 項目の得点が有意に低下した。さらに、「むずかしい」はカンファレンスをしなかった A 群では有意に上昇したが、B 群では得点の上昇はわずかであり有意差はなかった。

このような変化の原因として考えられることは、見学実習だけでカンファレンスをしなかった学生の対児感情が、重症な児の救命や高度な治療処置、医療器械に囲まれた特殊な環境に対する緊張や不安が児への感情に影響しているのではないかとということがある¹⁰⁾。また、カンファレンスの中で学生は、NICU 看護に対する学び、児に対する否定的感情、NICU 看護に対する不安などについて意見交換をした。そして、それに対して臨床指導者や教員は NICU 看護に対する考え方や喜び、NICU の児に対する想いを話した。学生の児に対する否定的感情や葛藤感情は、学生同士、あるいは臨床指導者や教員との意見交換を通して、整理されて安定し、児を否定的にとらえる感情を抑えることができたと考えられる。

岡田¹¹⁾は、葛藤体験を語るカンファレンスは、「語ること」それ自体とその語りをめぐる教員や学生たちとの相互作用が、個々の学生の情緒の安定を促し、

否定的に認識される葛藤体験を自己の成長にとって意味あるものとして肯定的に受け止めることを顕在化させたと述べていることから、カンファレンスを導入した実習方法は、学生の NICU の児に対する否定的感情を抑えることに有効であると推察できる。

このように児に対して直接ケアを行わず接触体験がなくても、カンファレンスによって学生の児に対するネガティブな感情が、NICU に入院している児をかわいいと思う気持ちに変化し、NICU 看護の基本的姿勢に近づくことができたのではないかと考える。

V. まとめ

本研究は、看護学生 3 年次の小児看護学実習における NICU 見学実習の前後に、「対児感情評定尺度」の質問紙調査を行い、学生の対児感情の変化を調査した。NICU 見学実習にカンファレンスを導入した実習方法について学生の対児感情の視点から検討することを目的とした。

これにより、以下の結果が得られた。

1. カンファレンスをしなかった学生の接近得点は有意に低下し、拮抗指数が有意に高くなった。カンファレンスを行った学生の接近得点・回避得点・拮抗指数はともに有意な低下があった。
2. NICU 実習後のカンファレンスは、学生の児に対するネガティブな感情に影響があったと推察できる。

この研究は母性看護学実習や保育園実習および乳児接触体験の有無などの学生の背景が対児感情に及ぼす影響については検討していない。また、同一対象による比較ができないことが研究の限界である。NICU 看護では児を慈しみ、近づこうとする気持ちが大切であり、NICU 看護を指導するにあたり、学生の児に対するネガティブな感情を NICU 看護に結び付けて考えられるような実習指導方法についてさらに評価検討することが今後の課題である。

引用文献

- 1) 大津廣子：看護学生の未熟児に対するイメージ—3 年過程の 1 年生と 3 年生の比較—, 第 20 回日本看護学会集録 (看護教育), 86~88, 1989.
- 2) 花沢成一：母性心理学, 医学書院, 1992.
- 3) 岩戸教子・関森みゆき・斉藤絹代他：低出生体重児の

- コット移床による両親の育児行動と対児感情の変化,
日本小児看護研究学会誌, 7(1), 70~71, 1998.
- 4) 関森みゆき・三輪百合子: 低出生体重児の経口哺乳が母親の対児感情及び愛着行動に及ぼす影響, 日本小児看護研究学会誌, 7(1), 72~73, 1998.
 - 5) 中島登美子: 早期産の母親の子どもに対する愛着的感情と気分—カンガルーケアと抱っこケアを実施した母親の退院前の比較から—, 日本看護学会誌, 10 (1), 43~49, 2001.
 - 6) 森下節子: 看護学生の母性意識の発達—母性看護学実習にみる意識の変容—, 母性衛生, 33 (3), 297~303, 1992.
 - 7) 土居久子・大槻優子: 母性看護学実習と母性意識の変容—花沢の対児感情評定尺度・母性理念質問紙を用いた実習前後の対児感情・母性意識の測定から—, 順天堂医療短期大学紀要4巻, 50~58, 1993.
 - 8) 和田佳子・今津ひとみ・大石武信他: 看護学生の対児感情に及ぼす母性看護実習の影響, 日本心理学会第63回大会 発表論文集, 895, 1999.
 - 9) 嶋松陽子: 対児感情にみる看護学生の母性意識の発達—低出生体重児との接触体験が及ぼす影響—, 聖マリア学院短期大学紀要, 11巻, 22~31, 1996.
 - 10) 大久保明子・福原紀・秋山啓子他: NICU 見学実習による対児感情の変化, 第31回日本看護学会論文集(看護教育), 15~17, 2000.
 - 11) 岡田ルリ子: 学生のリフレクションを喚起した発問—臨地実習での葛藤体験を語るカンファレンスにおいて—, Quality nursing, 5(7), 14~19, 1999.